



Title	名誉教授木村元一略歴
Author(s)	
Citation	一橋論叢, 75(1): 129-135
Issue Date	1976-01-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/11766
Right	

名譽教授木村元一略歴

明治四十五年（一九一二年）

一月一日 宮城県志田郡志田村（現在古川市）に陽三郎・きゑの長男として生まる。

大正五年（一九一六年）

五月 父（大連汽船株式会社天潮丸乗組司厨長）の勤務の都合で居を横浜市を経て大連市に移す。

大正七年（一九一八年）

四月 大連朝日小学校（当時第一尋常小学校）（国本小太郎校長）に入学。担任今泉作治訓導、のち中平才次訓導。

大正十三年（一九二四年）

三月 大連朝日小学校卒業。

四月 私立大連商業学校（山崎正矩校長）に無試験入学。

大正十四年（一九二五年）

十月 同校の飛越編入試験に合格。二年一組より三年一組に編入さる。担任関与三郎教諭。

昭和三年（一九二八年）

三月 私立大連商業学校卒業。居を和歌山市に移す。

四月 和歌山高等商業学校（岡本一郎校長）に無試験入学。教授陣に宮川実、岩城忠一、古林喜楽、木村和三郎、堀潮、

印南博吉、府川哲雄の諸教授がおられた。

昭和六年（一九三二年）

三月 和歌山高等商業学校を卒業。居を東京市に移す。

四月 東京商科大学（佐野善作学長）に入学。

昭和七年（一九三二年）

四月 井藤半彌教授のゼミナールに入り主として新カント派社会主義の研究に従う。

昭和九年（一九三四年）

三月 東京商科大学学士試験合格。論文「政策論の基本問題」。

四月 同大学研究科に入り、昭和十五年三月まで、主として「財政社会学」の研究に従う。研究科に在籍中、私立高輪商業学校等で教鞭をとる。河越虎之進、岡田隆平、植村和堂、小野武雄等の諸氏と知り合う。また国際文化協会発行の会報のために海外の評論（英文・独文）を翻訳して、その数百篇を超える。

昭和十五年（一九四〇年）

三月 東京商科大学助手に任せらる。

四月 同予科助教授に併任さる。

青山学院高等商業部講師となる。三年継続。

昭和十七年（一九四二年）

八月 東京商科大学助教授兼東京商科大学予科教授に任せらる。

昭和二十年（一九四五年）

六月 学徒援農部隊の監督のため北海道相内村に出張中召集令状を受け、仙台第二師団空戸隊に入隊、熊本県松橋町に派遣される。通信線の埋設に従事する。

十月 復員。一時宮城県古川市の疎開先に滞在後、東京に戻る。

昭和二十三年（一九四八年）

十月 東京商科大学学務課長事務取扱を命ぜらる。上原専祿学長の下で二十四年二月まで在任する。

昭和二十五年（一九五〇年）

四月 一橋大学東京商科大学教授に昇任。

七月 和歌山大学に出講、一週間の集中講義を行なう。

昭和二十六年（一九五一年）

四月 一橋大学経済学部教授に配置換。

五月 税務大学校講師を委嘱され四十二年三月まで財政学の講義を行なう。

十一月 日本財政学会の理事に選ばれる。その後再選を重ね現在に至る。

昭和二十八年（一九五三年）

四月 一橋大学大学院経済学研究科担当を命ぜらる。

十月 北海道大学経済学研究科の非常勤講師に併任され、一週間財政学特殊問題の演習を行なう。

自治大学校講師を委嘱され、引きつづき財政学の講義を行ない現在に至る。

昭和二十九年（一九五四年）

七月 北海道大学経済学研究科において、再び十日間の演習を行なう。

八月 フルブライト全額支給研究員の選考に入り、アメリカ合衆国カリフォルニア州パークレイに留学。アール・ロール

フ、ジョージ・ブレイク、チロー・ミン・リー等の諸教授と知り合う。合衆国の税制および税務の実態を調査するため、南部、東部、北西部の諸州を歴訪する。全行程グレイハウンド・バスを利用、約二カ月を要する。三十年七月帰国。往路は氷川丸、帰路はハワイ経由の日航機。

昭和三十三年（一九五七年）

八月 一橋大学評議員に併任さる。三十四年三月任期満了。

昭和三十三年（一九五八年）

十二月 富山大学経済学部講師に併任され、財政学の集中講義を行なう。

昭和三十四年（一九五九年）

五月 税制調査会委員に任命さる。この年より昭和四十三年まで九年間税制改正に関する調査と審議に加わり、しばしば部会長、基礎問題小委員長などになる。

昭和三十五年（一九六〇年）

四月 医療制度調査会委員を委嘱さる。二年で任期満了。

五月 外務公務員採用上級試験委員に併任さる。その後現在に至るまで毎年試験委員となる。

八月 経済審議会専門委員に任命さる。

昭和三十六年（一九六一年）

八月 日本財政学会代表として海外に派遣さる。イスラエル国ジェルサレムで開催のIFFA大会ならびにポトランド国ワルソーで開催のIFFP大会に出席する。往路にタイ、インド、イタリア、オーストリアの諸国、帰路ドイツ、フランス、スペイン、ベルギー、オランダの諸国を歴訪しアメリカ合衆国を経て十月帰国、全行程空路による。

昭和三十七年（一九六二年）

- 一月 一橋大学より経済学博士の称号を授与される。論文題目「財政学の経済体制的考察」。
- 五月 補助金等合理化審議会委員に任命さる。任期三年。この前後より現地視察の機会にめぐまる。現在までの視察箇所は、対馬、五島、甕島などの離島を含めほとんど全国にわたる。

昭和三十八年（一九六三年）

- 四月 一橋大学評議員（任期二年）となる。
- 七月 全国知事会地方行政調査特別委員会（三年余継続）の委員となる。和歌山大学経済学部講師に併任され、財政学の集中講義を行なう。

昭和三十九年（一九六四年）

- 四月 成蹊大学講師となり、四十八年三月まで隔年または、連年地方財政論（経済学部）、後財政学（法学部）、を講義する。
- 九月 自治省参与に任ぜられる。

昭和四十年（一九六五年）

- 四月 一橋大学評議員に併任される。
- 八月 経済学部長に併任される（任期二年）。
- 九月 国有財産関東地方審議会委員に併任される。引続き更新して現在に至る。

昭和四十一年（一九六六年）

- 九月 地方制度調査委員会に任命さる。引続き更新を重ねて現在に至る。

昭和四十二年（一九六七年）

五月 アジア経済研究所の研究計画に参加、金融・財政部門担当の主査となる。

昭和四十三年（一九六八年）

八月 アジア経済研究所の委嘱を受け、大韓民国および中華民國の金融財政事情視察のため、二週間にわたり渡航する。

昭和四十四年（一九六九年）

六月 日本学術会議より、経済学研究連絡委員会委員を委嘱され、現在に至る。

十一月 一橋大学経済学部長及び評議員に再任される。この前後篆刻および写経にとり自らを慰める。篆刻作品石材黄

楊材合わせて五十顆を超える。学園紛争の鎮静した四十六年五月任期満了をまたず辞任。

昭和四十五年（一九七〇年）

十月 「府県税収格差の実証研究」（大川政三、石弘光と共同）に対し毎日学術奨励賞を受ける。

昭和四十六年（一九七一年）

九月 経済学・商学視学委員（文部省大学学術局）に任命される。四十八年八月、任期更新現在に至る。

昭和四十七年（一九七二年）

八月 賜暇休暇を得て厚生年金病院で網膜剝離の手術を受く。

九月 司法試験（第二次試験）審査委員に併任。四十九年一月に任期を更新され同年十二月まで。

I I F P（国際財政学会）ニュー・ヨーク大会において同会理事に選出される。

昭和四十八年（一九七三年）

六月 第二十九回国際財政学会大会（バルセロナ）出席及び資料収集のため、スペイン、ポルトガル、デンマーク、アメリカ、メキシコ、ペルー、チリ、アルゼンチン、ブラジルへ渡航する件（八月十日―九月十五日）承認を受ける。

七月 定期診断の結果早期癌が検出され、上記渡航を中止するのやむなきに至る。八月東京女子医大消化器病センターにおいて胃三分の二の切除手術を受ける。

十二月 財政制度審議会委員に併任される。
術後障害のため二週間入院。

昭和四十九年（一九七四年）

五月 国税審査委員会に併任され、同会長に選ばれる。

八月 三十回国際財政学会理事会ならびに大会（ルーマニヤ国ネブチーン）に出席する。この機会にデンマーク、ベルギー、ドイツ、フランス、オーストリア、ポルトガル、アメリカを訪問、財政事情を視察調査する。八月二十日出発、九月十六日帰国。

十一月 術後障害および精密検査のため二週間入院。

昭和五十年（一九七五年）

三月 停年退職、一橋大学名譽教授の称号を受けることとなる。在職三十五年、この間、財政学、地方財政論、財政学各論、財政学特殊問題（大学院）、経済通論（予科および前期）などの講義ならびに演習を担当、ゼミナリストの数三百三十名を超える。また地方財務協会に設けられた地方財政研究会のメンバーとなり井藤半彌会長の指導をうけ、研究会開催回数百六十六回（毎月一回を原則とする）に及ぶ。昭和二十五年創立以来、日本租税研究協会の評議員に挙げられているのも井藤半彌理事の推輓による。

一橋大学における財政学部門の後継者に大川政三教授および石弘光助教授を得、後顧の憂なきを喜ぶ。

四月 木村会の破格の支援を得て欧米一巡の旅に出る。同行妻久子。旅程一カ月、訪問先はほぼ前回とおなじく、丁、

仏、葡、伊、端、壘、独、和、白、米の諸国。三男光彦（大阪大学大学院修士課程経済学専攻）は大阪に住むが、長男一彦（都立王子工業高校教諭、体育担当）一家、ならびに次男元比古（東京芝浦電気・原子力機器開発試験室勤務）は住居が近く、留守宅を見巡わる。